べっぷの文化財

No. 24
平成5年3月

― 今はなき寺々 ―

長円寺
福通寺
真光寺
吉祥寺
松音寺
極楽寺
善光寺

松音寺の古搭（別府市指定有形文化財）

別府市教育委員会
別府市文化財調査員会

長　福　寺

別府市　内　竈

国立別府病院の西方に、八幡竈門神社がある。中世、宇佐弥勤寺の荘園であった竈門荘の荘鎮守である。この神社の表参道に小さな観音堂があり、近くの住民は「おかんのんさま」と云い伝えている。この観音堂のお世話をしてきているのが、チョークジの屋号で呼ばれている溝部和己氏である。チョークジとは竈門神社の神宮寺の一つである長福寺のことである。

寛政4年（1792）の奥書のある竈門神社記によると、平安時代より別当としての神宮寺と長福寺・光明寺（溝部学園創立者溝部ミツエ氏の祖）・自応寺・他応寺・観音寺・養徳寺が共に八幡宮に対して、真言神道による司祭者として仕えている。

この地の地頭職は竈門氏（本姓漆嶋）で、竈門荘の小坂、亀川、内竈門、平田、野田、鉄輪を支配していた。神宮寺等は竈門宮の神前で、竈門氏の武運長久と荘内の五穀成就を祈願していた。

文禄二年（1593）朝鮮出陣の失敗によって大友氏の豊後除国がおきる。大友氏の滅亡とともに竈門氏も忽然と消えてしまう。スポンサーを失った神社は祭典も衰退し、元和年間には別当神宮寺のみがささやかに仏神事を務めている。

やがて元禄年間になると、神社には宮司神宮寺の下に社人大宮司、祝主、祝が神事に参加するようになり、内竈門、野田、古市、亀川、平田の五ヶ村の祈願所となって、新しく村人たちの氏神として生れ変った。宇佐神宮寺との結びつきは、江戸時代末期まで神宮寺が細々と保ち続けている。

江戸時代に記された八幡宮の宮座帳に、武家座席として地頭・田ノ口・麻生・友永。社家座席として、神宮寺・大宮司・麻生・河野・安森・温見両人・長福寺とある。温水両人とは、温水の宗之進（代々氏神の膳部を司どる家）・はらりやの吉之進（井上友太郎氏、祭典の時1人角力を奉納する家）で、最後に長福寺とあるが、温水両人の次に記されているところを見ると、俗人としての参加であることがわかる。

長福寺の建立に関する棟札が神社に残っている。

その一

□文5年、本寺神宮寺・地頭吉良忠兵衛　「奉建立長福寺堂一宇請願成就如意安全」　大工、野田村大和勘之亟、建立施主　川原彦左衛門とある。戦前神社を調査した国東の河野清美先生は、天文5年（1536）と読み取っているが、吉良忠兵衛は江戸時代の庄屋であるし、天文・弘治・永禄年間は、竈門氏が豊後国主大友氏の配下として活躍している時であるので、天文は誤りであることがわかる。

その二

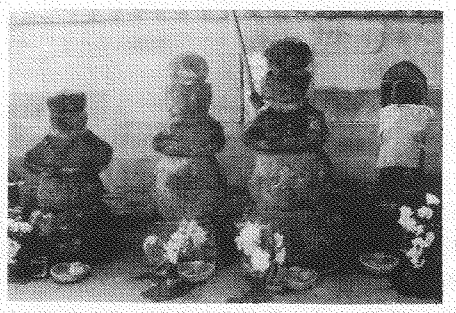
文政11年（1828）に建立されている。これには本寺神宮寺しか記されていないので、氏子五ヶ村による建立ではないかと思われる。

長福寺は竈門宮の一部分で、竈門宮と表裏一体の関係にあったわけである。

現在、維持管理は溝部氏の手でなされ、今まで数回の修理を加えて、地域の大切な文化財として守られている。

（土屋公照）

長福寺観音堂内に祀る千手観世音菩薩像



長福寺観音堂前の五輪塔と板碑

円　通　寺

別府市　北石垣

円通寺の縁起の前段は、本尊如意輪観世音菩薩銅像の由来についてである。すなはち、この仏像は、波斯匿国の王女勝鬘夫人が鋳たてまつった銅像千躰のうちの一体で、円珍僧都が唐より勧請し比叡山に納めていたものである。その後、浄蔵法師の護持佛となり、円通寺にもたらされて安置されたと述べられている。

堂宇の建立についての由緒は、浄蔵法師が諸国行脚の後、(以下縁起より)

「法師豊前の国宇佐郡深見谷に来り種々の奇瑞あり　初め天より白米降り　次に金釵を降りしめ第三番に星降臨し玉ふ　大いさ二寸計り昼夜光をはなって嚇燿たり　則ち梵篋に納めて一宇の精舎を営建して釵星寺とし今に寺産となる　師当国越路の時途中に於て貴婦人現す　師問て云く其婦人は何人ぞや　婦人答へて言く朕久しく亀山に住して王民を擁護す　今師の行徳を□て茲に来れり　此昿野を過て師に有縁の地あり　一宇の精舎を造立せば末永く繁昌せん　我先に行て勝地を示さんと言終て見へず　師鶴見嶽の麓に来り見給へば　方尺余の八色の石あり　数百の鳩群集してこれを守護す　昼夜毫光を放つ　是誠に八幡大菩薩の示現なりと歓喜す　此地に屡徘徊するに師の功験を開く　遠近の庶民大いに悦び恰も窮子の父母に逢るがごとし　郷士師に告ていはく昔より此地に二災あり　一には前海の中に悪龍捷て時々悪風を発して五穀損し渡海の船難船多く　二には此地閑熱の地あって耕作生立ず俗に呼で地獄原といふ　烈焔四隣に亘り居民甚だ是を苦しむ　師の大威力を以て是を除滅し給へ　師の言はく爾り　師自ら法華経八分を石書して海底にしづめ給へば海上常に穏にして其後風波の難なし　師彼の閑熱の地に赴き玉ふて灑水の印を結んで加持し給へば黒煙たちまち消滅し今その地に余習相残れり　其地に就て寺宇を創し石垣寺と号す　承平五年乙未九月八日落成す　師の護持尊の如意輪観世音を安置し奉て本尊とす　此地の辰巳において一宇の社頭を営で伴の石を神躰として石垣八幡宮と称し石垣寺の鎮守と崇敬し奉る云々

往古は大洪刹たりといへども星霜相重て纔の小堂となる　然るところに当国の守護大名大友出羽守新藏人左近将監従四位ノ上藤原貞親　深く佛乗を信じて　延慶元年戊申歳播州書写山貫主尭勇法印を屈請して茲に大慈山八幡圓通寺仁王国院と改む　美田百八拾余町を寄付し本堂六間四面　常行堂　護摩堂　毘沙門堂　開山堂　鐘楼　其外諸堂多しと雖も　九牛の一毛を誌すのみ」

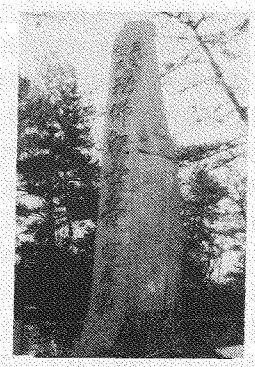
浄蔵法師は、宇佐亀山に住む貴婦人こと宇佐大

神の託宣を受けて、承平五年（933）九月八日に「石垣寺」を建立し如意輪観世音菩薩を安置し、南東の地に「石垣八幡宮」を建て石垣寺の鎮守とした。

その後、石垣寺は、延慶元年（1308）に大友貞親が招聘した播州書写山貫主尭勇法師により「大慈山円通寺仁王院」と改められ、美田の寄進を受けて伽藍が建立された。

現在、円通寺は実存しないが石垣八幡宮（諏訪本）の北西部に（円通寺）の字名が残っている。

（藤内喜六）



上人ヶ浜公園内に建つ円通寺の碑

真　光　寺

別府市　青山町

真光寺の由緒について、施主家である糸永家（朝見３丁目糸永益祥）に伝わる由緒書を要約すれば次のようである。

朝見村の富農糸永市郎兵衛の末子平五郎は出家を志し、当時、朝見村に朝観庵を結んでいた業海和尚のもとで修行したが一族に反対された。やがて、平五郎は河内の法雲寺の恵極和尚の弟子となり法名を恵海と称し、十八年間随身して徳を積んだ。この間兄弟子の綱宗とは朋輩として切磋琢磨し修行に励んだ。

恵海は、宝永４年故郷の朝見村に帰り一族に図って寺を建立しようしたが病をえて、綱宗に跡を託して逝去した。恵海の志をうけ、翌五年（1707）春に綱宗が下向して普應山真光寺を建立した。真光寺の寺号は東山の小野村に古くからあった真光院と呼ばれる地蔵堂を貰い受けて寺号とした。同年三月末安座供養を済ませ、高松役所・江戸寺社奉行に届け出た。

糸永家では、綱宗和尚を開山にと懇願したが、和尚は豊後に黄檗宗の大祖木庵和尚開山の寺院がないので木庵和尚を勧請して開山とし、恵海の師僧恵極和尚を二代、恵海を開基として牌に名を刻した。

真光寺の建立後、しばらく綱宗和尚が住職を勤めたが、享保十年八月綱宗和尚は恵極和尚の命により日向国佐渡原の清水寺に移り、後住として美濃国大垣より良峰和尚が迎えられた。

なお、願主糸永惣右衛門の「願書」によれば、正徳六年に黄檗宗の本山萬福寺に末派の願いを出し、「本寺書翰」では黄檗宗の木庵和尚一派の僧侶が代々住持を勤めていたことがうかがわれる。

真光寺は小さな堂宇を残していたが、昭和34年に焼失した。

真光寺由緒之事

一老父市郎兵衛男子三人之内末子平五郎者十四五之頃ゟ出家之望有之候處　貞享四年之冬府内長福庵焼失之砌業海和尚と申爰元朝観庵ニ御住居被成　依之平五郎昼夜遂御指南誦経座禅信心をかたむけ三年之間出精候而即時ニ出家成可致之處親類共打寄一統ニ差留候故無據見合候内　直ニ河内法雲寺へ罷越恵極和尚之弟子ニ成法名恵海元□与申前後十八年之間御随身申修行之徳力茂得程有之候而　方丈老和尚之御弟子五十人之就中綱宗和尚与申者抜群之人ニ而三四年之間終始維那寮御勤被成大衆方御引廻シ之中　法弟恵海師者別而御親切ニ御指南有之候間金鉄之交リ

与承　然ルニ宝永四年之冬願望有之候間老和尚へ暇ヲ乞久々ニ罷下リ親類家門ニ對談シ一宇建立之願望相企致候内　十月下旬ゟ風与病気ニ付終ニ十一月七日帰舞致候　尤臨終前綱宗和尚へ契約之訳委細某ニ頼置候故中陰之内早速法雲寺老和尚始綱宗和尚へ帰舞之望申上候處綱宗和尚ゟ御細書御返翰明春者早々罷下リ恵海法弟願望相達可申と被仰遣　左候而宝永五年二月上旬ニ御下リ被成直ニ一宇御造営之御企ニ而不日ニ成就之央寺号之儀御吟味之處　其頃小野村傍リニ真光院与申傳へ古キ地蔵堂有之由聞傳候而拙者罷越村人ニ對談致此真光院を本寺共ニ貫受綱宗和尚思召ニ而普應山真光寺之引寺号と唱　然ル處普請之中崇福寺ゟ違乱ニ及暫ク事六ケ敷候處惣旦那取計ニ而内済致三月末ニ安座供養抔相済其後引寺号願書高松御役所及江戸寺社奉行所願之通被仰付　然ル處我々打寄綱宗和尚御願申上候ニ者是迄御苦労方被遊恵海願望御成就被下候得ハ御開山之牌名ヲ立我等子孫者勿論後住之人ニ茂崇放為申度願候得者　綱宗和尚段々法儀之訳被仰聞豊後一國黄檗之大祖木庵和尚之開山所無之間乍小院木庵和尚勧請開山と称シ当本師恵極和尚二代と称シ家者三代ニ而可然与被仰付尚又恵海法弟ハ抑当山之開基牌名ヲ立未以祭典無怠可致と御申付被成　然ル處法雲寺老和尚ゟ御書翰到来真光寺者施主家と相談之上後住定置綱宗和尚者日州佐渡原之清水寺ニ引越可致入院由被仰遣　依之真光寺後住之儀美濃之大柿ニ法弟良峰和尚住庵致罷有候間以夫僧申請住職可申付与被仰　早速御令徒自光禅師以書翰彼地へ御越被成往来五十日之内道同ニ而御下リ被成享保十年八月十二日ニ良峰和尚御入院相済綱宗和尚ニ者早速日州へ御引越被成右之次第記置候者也

真光寺施主家四代目

糸永惣右衛門

享保十年八月

（土屋公照）

糸永家墓地にある真光寺の無縫塔。
向って左が開基恵海の塔

吉　祥　寺

別府市　乙　原

龍源山吉祥寺は、大友氏八代氏時が、康永元年（1342）に鎌倉より昌華祐和尚を招いて創建した禅宗系の寺院で、寺域は現在のケーブルラクテンチ及び乙原地区の一部を占めたといわれる大寺院であった。

乙原地方は奈良平安の頃は朝見郷に属し豊後国司の所管するところであった。建久七年（1196）大友能直が豊後の守護職となるに及んでこの地は大友氏の所領となった。大友八代氏時が守護になると、氏時は康永元年（1342）にこの地に禅寺を建立せんとして大伽藍の建立に着手、貞和三年（1347）一月二十一日に鎌倉より昌華祐和尚を招請し開山とし、乙原は寺院を中心として栄えた。当時この地は、御塔原（オントーハル）といわれていた。

この後吉祥寺は幾多の盛衰を繰り返し、豊後国志によれば、文化元年（1804）の頃には、わずかな遺物を残し廃寺となっていたようである。

乙原の浜崎家には次のような「龍源山吉祥禪寺観音大士之縁起」（写）が残されている。

夫當山之本尊観音大士之聖像者仁聞菩薩之御製也上古仁徳天皇五丁亥載安置於當山既得一千有餘年盖尋繹其來由從當山去四町山中有澗水之飛流郷人

傳曰音羽之瀧曾生身之観音大士示現於飛流而常放種々瑞相白浪滔々紫雲靉靆也仁聞菩薩遥有聖覧之而即其貝生身之相好故異興世間通例之相好矣然後物換星移建久七丙辰載天下之武将源頼朝公之實子大友豊前之前司左近将監能直公世人専稱大友市法師小字也即是市法師丸也世人誤闕凡字歟官領當國而有下向恭敬比観音大士也其後代々之國守無不恭敬之特第七世氏泰公適子刑部太輔氏時公亦常信之也時村中有大池大蛇住其中上敵國君下悩万民也於是氏時公雖欲退治之不及人力故欲借彼観音大士之威神力而一心念之嚴然即現大自在天身而持数千之戈來突之也氏時公深歡喜其感應寄附数百石之寺領而建立大伽藍山名龍源寺號吉祥並建立塔司六箇院東之坊奥之坊西之坊天床坊南之坊岩之坊即為氏寺從鎌倉寵請昌華祐公大和尚而稱之開祖又二祖惠顕大和尚俗濱崎椎守頼直二男舎人直顕云也至此代大伽藍其外諸堂悉為成就因茲太守始貴其徳功尊敬不少時之人是観音大士之可為化身渇仰之心深無云不為隨喜也故佛法興隆武門繁栄也雖然悪蛇之死霊尚未治依之自帝為伏死地之霊追贈二品位故蛇霊即伏住此池今成乾田矣從上古霊佛者皆出現於深山幽谷必其地在守護神故當山亦有陪八天狗厥託宣曰棲遅於當山而三六時中念吾者當有守護之感應自筆之礼有之第一防火災病難水難諸難不起之守也因茲遠近之衆生無不為信仰之也山號龍源回首於前山峨岩突兀恰如飛龍入曰之雄瀧雌瀧是其謂欺謂村乙原是須音羽原有二品塚僅累土成推耳蛇骨仍石非石能治斬疵止血妙也蛇之枕石今深没於地中少不見也氏時公之石塔此當山之舊跡或人從□孔□謾禮其尊容忽眼暗失明哉為懺謝其罪種樹作禮拜供養者眼即如故如是當山之観音大士者息多霊験賞罰是故一心念之生身之観音大士示現於彼飛流禮其生身之尊容人普象多也昔年隣村當郷盡為烽火所焼其時観音大士者飛行於他方其遺蹤在於四隣中其不可思議之事不可擧數也元来為秘佛故不可疎拜衆人克々成禮拜供養信之江不可疑焉

吉祥寺跡には、開山塔、大友氏時之塔、宝篋印塔、寺鐘、月見石、二十八人塚、庚申塚などが残されており、開山塔には「當寺開山昌華祐和尚貞和三年丁亥一月廿一日」、大友氏時之塔には「文和四年乙年　大友氏時之塔　二月廿一日」の銘文がある。

吉祥寺鐘には

「本寺創建以来殿堂屋宇梢落成矣唯鐘一件缺之蠡之住持比丘知祐發大願力而募諸縁成永徳三年九月二十六日其神足玄機侍者仍記其事而乞銘于余々乃嘉其志作銘丶曰

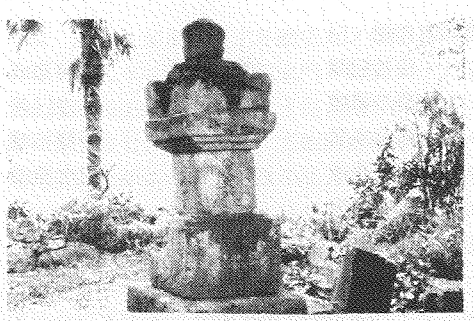
法社紀綱　齊之以禮　禮待楽成
楽乃禮體　楽發于器　名之曰鐘
鐘之為器　外實内虚　聲隨扣撃
四方皆通　地獄脱苦　労生啓蒙
惟功惟徳　在于爾躬

國暦明徳二年辛末七月十七日
萬壽比丘宗嘉撰
本寺住持比丘知祐
鑄鐘工匠又次郎　」

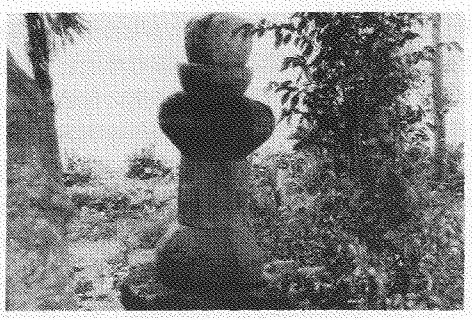
の刻銘があり、更に追刻されている。本鐘は吉祥寺にあったが、永享年間に大友氏と大内氏の争いの際戦利品として持ち去られた。追刻はこの後のものである。現在は広島県高田郡高林坊の所蔵であり、広島県指定の有形文化財となっている。

（後藤武夫）

吉祥寺鐘（広島県高林坊所蔵）



大友氏時之塔（乙原浜崎文男邸内）



吉祥寺開山塔（乙原浜崎文男邸内）

松　音　寺

別府市　赤　松

松音寺は、もと臨済宗妙心寺派の禅寺で大分市萬寿寺の末寺であった。同寺には開山と本尊十一面観世音菩薩について次のような縁起が残されている。

抑檀上ニ敬ヒ奉ル尊像ハ仁聞菩薩ノ真作ニシテ十一面観世音菩薩ナリ　其ノ来由ヲ尋ヌルニ昔シ播磨ノ国四十一萬八千石ヲ領ス赤松家ノ大名ニシテ但馬入道真隆ハ足利家ノ為ニ亡サレ　但馬入道ハ其ノ臣宇野新藤五郎ト共に遁レ去リ常ニ尊信シ玉フ護持佛ヲ肩負ヒ奉リ豊后國速見郡濱脇村字赤松村ニ居住ス后チ大友氏ニ仕ヘ五萬五千石ヲ領ス　時ニ護持佛ヲ本尊トシ一宇ヲ建立ス　實ニ建久七年丙辰年ナリ　即赤松村松音禅寺ノ御本尊之ナリ　爾後ハ豊后ノ國司大友家ノ祈願所トナル　其霊験ノ著シキコトハ昔ナ人ノ知ル所ナリ　然ルニ天正十四年島津修理ノ大夫義久大軍ヲ引率シテ日向ヨリ豊後ヘ乱入ノ時　其長臣新納武蔵守高崎城ニ抗敵ノ中當寺ハ兵火ニ係リ悉ク灰燼トナル　而メ御本尊大士ハ已ニ焼却セシト思ヒシニ其ノ后黒山字吉田ト云ヘル處ニ夜ナ々々光明アリ大サ牛ノ如シ　諸人之ヲ怪ムト雖ヘトモ何ノ所為ナルコトヲ知ラス　然ルニ前ノ阪路ニ帽子石ト云ウ處アリ　爰ニ乗馬ノ人至レハ悉ク落馬セサル者ナシ諸人不思議ノ思ヲナシ夜ナ々々光明ヲ放ツ處ヲ尋ヌルニ即兵燹ノ時失セサセ玉フ御本尊大士ハ叢中ニ安座シ玉ヘリ諸人歓喜シテ迎ヘ奉リ御堂再建ス　是ヨリ彼ノ吉田山ヲハ観音屋敷ト字シ帽子石ハ駒阪ト今ニ字セリ　此ノ大士ノ霊験記中ニハ難産ヲ免レ難病ヲ治癒シ災害ヲ除キ種々ノ感應ヲ蒙ル者枚挙ニ暇アラス　如是感應新タナル霊佛ナレハ常ニ秘佛トシ奉リ今年明治廿一年今月今日前年ノ開扉供養ヲ去ルコト六十一年ナリ　参詣各々希有ノ思ヲナシ至誠ノ心ヲ以テ謹ミ拝礼ヲ「　　」

本尊の十一面観世音菩薩は建久七丙辰年（1196）に宇野新藤五郎（尉）が播磨国より背負って赤松へ勧請した。その後宇野は大友氏に仕えたが、十一面観世音菩薩を本尊とする松音禅寺は大友氏の祈願所となり殷賑をきわめた。

松音禅寺が建立された赤松は、高崎山城北面に位置し銭瓶峠は城の腰より上野の館にいたる街道の要衝の地であった。そのため、天正十四年（1586）島津軍の侵攻による兵火にあい灰燼にきした。その後奇縁により本尊が見出され禅寺が再興されたと縁起に記されている。

開山は「勅諡寶覺真空雪村友梅禅師大和尚」といわれ、寺の裏手の墓地に貞和二年（1346）十二月二日と刻した開山塔がある。なおこの墓地には弘治三年（1557）十一月九日・天正三年（1575）二月八日入寂の「梁雲座元禅師」の無縫塔も残っている。（別府市指定文化財）

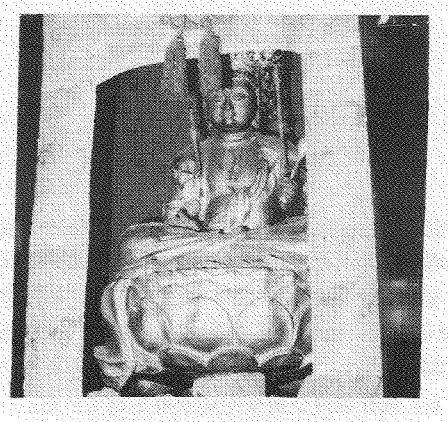
友梅禅師は、松音寺が草創されたと伝えられる建久七年より約150年くだる貞和二年に中興開山の祖とする安部巌氏の説考が妥当であろう。

松音寺の焼失について「速見郡史」は、慶長五年（1600）の石垣原合戦の戦火によるとするが、位置関係から考えてもこの説は難しい。兵火に罹ったとするならば、高崎山城の攻防に関わる永正十五年（1521）の朽網親満の乱か、天正十四年に島津義久が高崎城に籠もった義統を攻めたときの戦火しか考えられない。

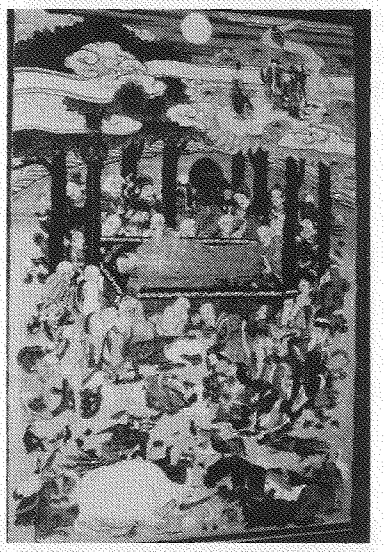
松音寺が歴史に登場するのは、宝暦十一年（1761）に赤松の百姓が府内藩の道普請を阻止して道奉行佐藤某などを拉致して堂内に監禁した「銭瓶石騒動」である。当寺には流島になった六人の位牌が残されている。

廃寺になった松音寺あとは公民館になっているが、本尊の十一面観世音菩薩のほかに、逗子入りの観世音菩薩立像・地蔵尊などの諸仏や開山友梅禅師の肖像画や釈迦涅槃図などが保存されている。なお、通称松音寺田と呼ばれる旧寺跡にあった五輪塔や板碑が松尾家墓地に保存されている。

（入江秀利）



松音寺の本尊十一面観世音菩薩像



松音寺の釈迦涅槃図

松音寺の（伝）友梅禅師の図

松音寺の古塔群

極　楽　寺

別府市　東　山

東山小野（枝郷２）にあった佛心山極楽寺跡の石塔群に囲まれて新しく建てられた極楽寺の庵がある。大野敏雄氏（72才）の談によると明治初年（廃仏毀釈の頃か）庵の建物は大野千代喜氏が引き取り移築し、仏像・位牌など引き取ったそうである。現在は再び新庵中に安置されている。

極楽寺の開基及びその年代は詳らかでないが、庵中に

・前永平海門當寺中興雷洲慧雲大和尚禅師（表）
　時于正徳三癸巳年七年十七日　　（裏）
・佛心山極楽禅寺中興雷洲両親也　　（表）

の位牌がある。

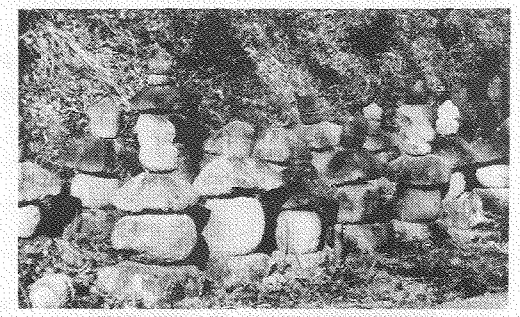
雷洲禅師は東山小野の出身で、元禄二年　別府村に曹洞宗永平寺派海門寺の堂宇を創建して、海門寺中興の祖（別府市誌昭八版）といわれる人である。

雷洲禅師は海門寺創建の後故郷に帰り、ついで極楽寺も中興して正徳三年（1713）ここに没したものと考えられる。雷洲禅師の墓石といわれる石造物が寺跡の付近にある。

現在、極楽寺の本尊は十一面観音（座像）であるが、曾ての極楽寺とは由緒深いと考えられる十一面観音（立像）が大野三郎氏宅に安置されている。

（入江秀利）

極楽寺庵内に安置されている十一面観世音菩薩像



極楽寺跡に残されている石塔群

善　光　寺

別府市　内　成

善光寺は、別府市大字内成勢場1613番地にあったと伝えられる。ここを中心に寺院が建ちその範囲は約四町歩に及んでいたと云われている。現況は田、畑、山林となっており、そこには当時の善光寺をしのばせる石塔群が現存する。

内成地区は、奈良平安時代は公家の所領であり、鎌倉時代には鎌倉幕府の一族、北条重時に支配されていた。

「雉城雑誌」には、鎌倉時代から室町時代にかけて、内成は特に仏教文化が開けて、蓮台寺、善光寺・東蓮寺、石城寺、大応寺、極楽寺等の寺院があったが、天正十四年（1586）島津軍の侵入による戦火のために、ほとんどの寺院は滅亡したと記されている。

また、同地内成の二宮家系図並びに、平野家系図の中にも、天正年間に薩摩の島津軍が内成に侵入し、寺院を焼き払ったという記載があることから、天正十四年に島津義久が大友義統を攻めた際の戦火により、内成地区の寺院は焼き払われ、善光寺もこの時廃寺になったのではないだろうか。

その後、善光寺の再興については不明であるが、平成4年、二宮清康氏が口伝をもとに同氏の敷地内に庵を建立し、阿弥陀如来像、釈迦如来像の2躰を安置し、奉祀している。

（後藤武夫）

善光寺跡に残されている地蔵菩薩像

善光寺跡を望む（中央に地蔵菩薩像、左に石塔群が見える）

あとがき

べっぷの文化財№20号の「寺社の縁起・由来記」に引き続いて、いまはなき寺々の縁起をあつめてみた。

いずれも、かつては門徒も多く法燈の絶えぬ賑やかな伽藍であった寺々も、いまでは庵となり、見る影もなくわずかにたたずまいを残すのみとなった寺、礎石も残さず跡かたもなくなってしまった寺と様々である。なかには、字名として今はない寺のありかを伝えるものもある。しかし、今でも地区の人々に手あつく祀られている本尊を拝んで、安堵したこともしばしばであった。

今回収録できたのは七か寺であるが、由緒・縁起も消え失せ、ただ古老の口伝のみに頼らざるをえない寺もあるが、今後とも消えた寺々の跡を尋ねて記録する努力を続けたい。

入江秀利

文責　別府市文化財調査員
藤内喜六
後藤武夫
入江秀利
土屋公照